

同窓会

の

チカラ

同窓会のための情報誌

2018

特集 ● 社会とともに活動する同窓会

- ・ 地域社会との協調：新潟県立海洋高等学校同窓会 能水会
- ・ 社会を向いた同窓会：兵庫県立兵庫高等学校同窓会 武陽会
- ・ 森をつくる：埼玉県立熊谷高等学校同窓会 熊高森づくりの会

リレー連載 ● 私と同窓会

- ・ 遠藤岩根（山形県立米沢興譲館高等学校同窓会）

紹介 ● 同窓会活動紹介

- ・ 補習科という支援：福島県立磐城高等学校同窓会
- ・ 確かな日々を綴る：宮崎県立宮崎大宮高等学校 弦月同窓会
いちいち会

- ・ 校内美化から街へ：滋賀県立伊香高等学校同窓会

わが学び舎

- ・ 栃木県立栃木高等学校

Our Proud

栃木県立栃木高等学校記念図書館（旧栃木県立栃木中学校記念図書館）
1914年（大正3年）11月竣工 木造2階建て瓦葺／登録有形文化財

Vol. 10

地域社会との協調

新潟県立海洋高等学校同窓会

のうすい 一般社団法人能水会

水産を通して国と地域に貢献する 新しい同窓会のカタチ



◀ 第10回 海洋立国推進功労者表彰・受賞祝賀会
2017年11月23日

●新潟県立海洋高等学校は、明治三十一年（一八九八）、地域の期待を担って地域の西頸城郡能生町立尋常高等小学校で水産の授業が開始されたことに始まる。水産系高校の目的は、言うまでもなく水産業に携わる人材の育成にあるが、近年では漁業、食品加工、船舶の知識の習得等に加え、バイオテクノロジー技術の研究開発等や養殖、新規商品の開発販売をも手がけるなど、これまでの高等学校の守備範囲を大きく広げ、より実践的社会的な存在として脚光を浴びつつある。そうした中、新潟県立海洋高等学校では、以前から地域社会と密接に連携し、独自の画期的な計画のもと、これまでにない世界に一步を踏み出そうとしている。そうしてその活動は、二〇一七年に、高校を核にした産学官連携による地域振興とキャリア教育の推進に対する功績と評価され「第十回海洋立国推進功労者表彰」を受けるまでに至った。こうした一連の活動と同窓会の関りを、活動推進の中心で活躍している方々に伺った。

日本は水産大国であり、漁業は国の根本の産業として多くの人材を必要とし、そのため都道府県のごとくに水産・海洋系の高校がありました。ご承知の通り、近年に至って少子化や国際情勢など様々な理由で漁業は縮小の傾向にあり、それと軌を一にして統廃合を余儀なくされて来たというのが水産・海洋系高校の現状です。そのため、どの高校も様々な生き残り策を講じてきたわけですし、我が新潟海洋高校もまた長きにわたり同様の苦闘を経験して来

ました。

こうした事態に私たちがとった作戦は、第一に県外への生徒募集活動の強化であり、そのため学生寮の整備などをはじめとした生徒の学ぶ環境作りに意を注いだこと、更に産学官連携事業を立ち上げたことです。こうした努力の結果、おかげさまで直近三年間は入学定員を満たしています。いずれも同窓会が深く関わっています。前者は純然たる生徒募集活動、後者は産学官と同窓会の協働活動で、マスコミにも取り上げられ、ユニークな水産高校と社会とのあり方を発信し続けています。その活動の中心となるのが産学官連携事業所「シーフードカンパニー能水商店」です。

学校発地域活性カンパニー

この「能水商店」の設立にはさまざまな経緯がありました。その背景としてあるのは「サケ」の存在です。学校のすぐ西側を流れる能生川では、一九七三年のサケの放流以降サケの湖上が見られるようになります。今では毎年約一萬尾ものサケがやってきます。サケは重要な魚種ですが、新潟県北部とは異なり、糸魚川市あたりはブリの食文化圏で、採卵採精した後のサケはほとんどが廃棄されていたんですね。本校の「食品科学コース」ではこの資源を有効利用すべく研究を重ね、ついに魚醬「最後の一滴」を開発し商品化に成功しました。魚醬の場合、原料の規格を選ばないというのも条件としては有利にはたきました。そしてこの魚醬の開発が、その後の能水商店の設立と各種商品の展開に繋がっていったのです。

この「最後の一滴」は、今では珍しい「魚醬」であること、それを高校生が開発したこと、などで話題を集め、二〇一三年から糸魚川市内の観光施設での販売が始まりました。やがて地元飲食店等でも使われだし、学校のPRを兼ねた首都圏での販売イベントにも参加するなど、徐々に知名度もアップしてきます。こうした状態が一年ほど続いた後、今後の魚醬の製造販売の可能性をシミュレーションしてみた結果、高校生による水産振興や雇用創出など、魚醬を中心とする商品開発の事業化と、それによる地域振興の可能性が見えてきました。

そこで、海洋高校同窓会である一般社団法人能水会を事業母体として二〇一五年四月に「能水商店」を立ち上げたわけです。また、この構想に対して糸魚川市も理解を示して下さり、事業所の開設にあたってはさまざまな支援を頂きました。

なぜカンパニー設立なのか

実は「能水商店」以前から本校では教員からさまざまなアイデアが出てきて種々商品を開発して参りました。この魚醬の前にも、幾つもの海産物関連商品が生み出されました。ただ、アイデアはあっても実際に製造販売するには、機械設備や時間の問題など、事業体としての設備とスタッフが必要になります。生徒が行うにはどうしても限界がありました。NPO法人という形も考えましたが、生徒や教員が行うには無理があります。しかも非営利事業にあつては寄附しか財源はありませんから、安定的な運営には不安があります。一方、一般企業と組んで研究開発をするやり方もあり



●連絡先
能水会事務局
〒 949-1352 新潟県糸魚川市能生 3040
TEL 025-566-3155 (海洋高校)
能水会携帯 090-5547-8832 (渡辺宏幸)
E-mail : watanabe.hiroyuki@nein.ed.jp

●シーフードカンパニー能水商店
〒 949-1352 新潟県糸魚川市能生 9396 番地
TEL : 025-556-6950 FAX : 025-556-6955
URL <http://www.nousui-shop.com/company/>



▲マレーシアの展示会へ出展
HALAL EXPO 2017年2月



左：松本 将史 (まつもと・まさふみ) 氏
海洋高等学校教諭 (食品科学コース)
中：伊藤 清正 (いとう・きよまさ) 氏
海洋高等学校同窓会 (能水会) 副会長
右：渡辺 宏幸 (わたなべ・ひろゆき) 氏
海洋高等学校同窓会 (能水会) 事務局長

学校と同窓会とカンパニー

ましたが、生徒たちの努力を最大限活かすためにはどうすれば良いのかということ時間をかけて協議し、あくまで生徒主導の活動として学校の活性化、さらには地元のおおこしに繋げていこうとの想いから糸魚川市との連携を模索したわけでした。

もちろん、こうした学校の取り組みと並行して同窓会も学校と緊密に連絡をとりあい、さまざまな活動を行いました。まず二〇一四年に、同窓会が一般社団法人に移行しました。これにより、母校だけではなく地域全体に活動のフィールドが広がりました。同窓会としては、地域の活性化の促進は母校発展の基礎だと考えていますし、また地元の海洋高校に対する信頼感、期待感の強さも十分理解しています。さらに、海洋高校の松本教諭の熱心かつ実践的な教育と、それに同調し水産系高校の新しい姿を目指す学校側の姿勢に接し、夢のある商品開発を進めるべきだと考え、この事業をひとつの企業体としてやれたらいいんじゃないかという思いが強くなったことで、その方向に沿ってさまざまな方面に

対し粘り強く働きかけてきたわけです。その結果、糸魚川市の後押しも得られ、地域振興の期待を担って「能水商店」はスタートしました。これは同窓会が運営しています。基幹商品である「最後の一滴」は、道の駅などでの試験販売を行い、一定の評判を得、そこから他の水産加工品の開発に進み今日に至っています。

この「能水商店」と海洋高校の関係ですが、当初は海洋高校の「生物資源研究部」

の生徒が部活として「社員役」をつとめていました。これとは別に、海洋高校の食品科学コースの三年生になると、能水商店の事業に関わる実習日が月数回あります。生徒は「製造開発部」「品質管理部」「マーケティング販売部」に分かれ、既存商品の製造、新商品開発、ロットごとの微生物試験や新商品の化学分析、EC(オンラインショップ)サイトの運営、HP更新、リテール(小売)サポート等の活動を、各部の担当教員の指導のもと実践します。これらを通して生徒は実際の食品産業というものを体験的に学び取り、また自分たちの働きが(小なりとはいえ)企業を支えている事実を実感することで、意識の上での大きなプラス効果が得られるものと考えています。

こうした実習は、短期のインターンシップではなく、学校での学習と企業実習を継続的に並行して行う「デュアルシステム」で、この仕組みはほぼ完成したといっているでしょう。私たちはこの仕組みを「糸魚川版デュアルシステム」と呼んでいます。これは「この学習活動が地域振興に結びつく付加価値を生んでいる」ことを示しています。実際に、今では事業の円滑運営のためにパート職員四名を雇用しています。また二〇一八年度からは、さらなる事業規模拡大のために高校発ベンチャー企業として法人化する予定です。もちろん、産学官連携により生徒のリアルな学習を保証し、生徒たちに変化する社会を生き抜く基礎的汎用的能力を身に付けさせるしくみは維持していきます。今の地方創生の時代に専門高校に与えられた新しい役割として、大きな可能性に期待しております。

水産高校の部活や授業の一環として生徒たちが作った水産加工品から始まった新しい展開、これまで地元でささやかに販売されていたものを、本当の意味の地域振興を目指して学校の枠を超えて展開していこうとするとき、同窓会は絶妙なポジションに居ると思えました。無論、母校支援の精神からも同窓会はこの事業のバックアップを決定、そのために動き易い立場を確保すべく同窓会の一般社団法人化に踏み切りました。そうして設立した能水商店は同窓会の事業として位置づけられ、事業そのものの管理運営はもちろん、生徒たちが首都圏でのPR活動を行う際の旅費や、更には海外でのPRイベントへの参加費、航費も全額支援、これまでにマレーシア、上海、スイスでのPRイベントに参加出張しています。こうした海外での経験を通じて、海外の大学の進学意欲が高まり、外国語を活かして水産業に従事したいと考える生徒も現れてきました。

新潟海洋高校では、以上のような、事業への積極的な進出と、そこで学ぶ生徒の活動を県内外の中学校を訪問しPRすることで入学希望者が増大しており、ここ最近では入学定員を満たしています。そして、市外や県外からの生徒たちを受け入れる環境として学生寮を用意、同窓会がこれを運営し、生徒の負担を軽減するなどの支援も併せて行っています。

同窓会としては、海洋高校の新たな展開を目的に、地域の発展のために同窓会が成し得ることは多々あるのだと、改めて決意を新たにしているところです。

社会を向いた同窓会

兵庫県立兵庫高等学校同窓会 ぶよう 武陽会

プルタブを集めて車椅子を贈る 同窓会の枠を広げた社会貢献事業

●兵庫県立兵庫高等学校の武陽会（同窓会）では、有志による「プルタブを集めて車椅子を贈ろう」という運動を続けている。二〇〇八年に開始して二〇一七年までの十年間で既に十六台の車椅子をしかるべき施設・団体に贈呈している。同窓会の社会貢献の一つの具体例として、「有志の会」の活動の趣旨と実際について、主導的役割を果たしている方々にお話を伺った。

私たち「武陽社会貢献有志の会」は、兵庫高校の同窓会である「武陽会」の中の有志が集まった組織で、会名の通り社会貢献をすることを目的として活動しています。具体的には、缶入飲料のプルタブなど、用済みとなったアルミニウム資源を集めて、これを金属を扱う企業に売り、その売上げで車椅子を購入し、必要とされている施設や団体に寄贈するというものです。そもそもこの会は、兵庫高校創立百周年

を契機に社会貢献する同窓会をめざす、という考えのもとに発足したもので、当時は社会貢献のひとつとして「プルタブ等の回収で、車椅子寄贈運動」というものがありました。これは一九九〇年に静岡の豊田さんという方が、街に散乱する空き缶公害をなくしてリサイクルさせることを思いつき、「環公害防止連絡協議会」を発足させたことに端を発した運動です。二〇〇〇年に豊田氏が病に倒れてからは、他の方が事業を受け継いで活動しています。私たち「有志の会」は、この運動に賛同しこれを支援する形で活動を始めたわけですが、車椅子の価格に相当する金額になるまでは、アルミを八百キログラム集める必要があ

るということで、目標に到達するまでに二年がかかりました。結果を見るまでの時間としては、かなり長いという気がします。こうしたことから「有志の会」では、武陽会員の紹介でアルミを買い取ってくれる企業を開拓、独自の活動を展開することになりました。その間、アルミの引き受け手は幾度か変わりましたが、幸いにも武陽会の会員の方々の理解と協力を得、アルミ資源の回収と車椅子の贈呈を継続し今日に至っております。安定的な活動を維持するために、「武陽社会貢献有志の会」は、自路線を歩んだわけですが、活動の目的内容、方法に関しては当初より何ら変わることはありません。

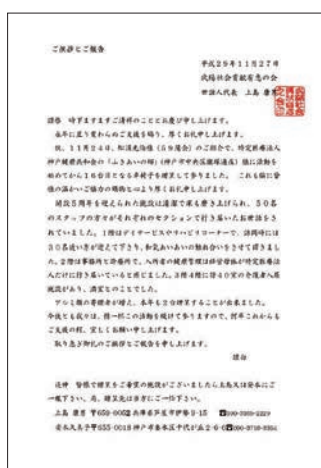
二〇〇八年、「武陽社会貢献有志の会」は第一回目の車椅子を、神戸空港ターミナル株式会社に寄贈いたしました。二年間の有志の方々の努力と、その結果集まった八百キロのアルミがようやく形になったわけで、実に感無量でありました。そしてこの活動は、アルミを集める人、そのアルミを引き受けて換金してくれる企業、車椅子のメーカーなど、多くの人々の協力があったり初めて行動が行動として成立しているという、きわめて当たり前のことを実感させてくれたものです。そのためには強力なリーダーシップと、多くの人々の善意の集積、運動を続けていく意思、さまざまな力と身軽に動く行動力がきわめて重要だと知りました。まさしく継続は力なりということですね。

現在の「有志の会」の活動はおおよそ次のような方針で展開されています。その第一は「贈呈する先の施設にとつて最も

便利と思われる車椅子を贈る」ということです。車椅子にも実にさまざまな種類があります。ですので贈呈先の希望を事前に聞き、極力それに沿うようにしています。

次に、集めるアルミ資源についてですが、現在はプルタブだけで八百キロ集めるのはかなり難しくなっています。それでアルミ缶本体や不要になったアルミサッシなども受け入れていますが、これでも集めるのに苦労しています。ようやく必要なアルミの量になったという段階で速やかに車椅子を購入し贈呈します。他の金属同様アルミも日々値段が上下しますので、善は急げで素早く行動することになっています。ですから贈呈の日は特に決まっております。可能なら年に何台でも贈呈したいというのが本当のところでは。

アルミ資源は、有志が心がけて集めるだけではなく、友人知人御近所などなど、多くの方面に提供を働きかけています。資源ゴミとして出すのならば下さい、とお願いするまでになったという話も聞きます。いざいざ関心の高まりは伝播するようで、おかげさまでアルミの集まり具合も良くなっています。





●連絡先 武陽会（兵庫高等学校同窓会）

〒 653-0804

神戸市長田区寺池町 1-4-1 兵庫県立兵庫高等学校内

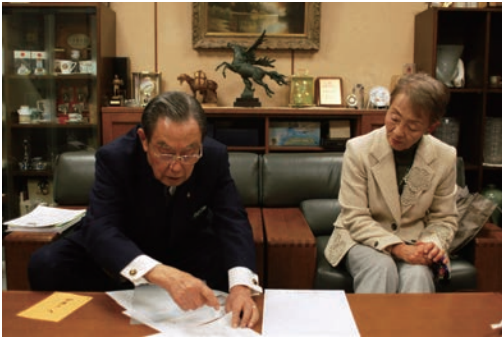
TEL / FAX 078-691-5595

E-mail : office@buyokai.org

URL : http://www.buyokai.org

左：上島 康男（うえしま・やすお）氏／武陽会顧問（39 陽会）

右：安本 久美子（やすもと・くみこ）氏／武陽会（49 陽会）



何があっても十台までは贈ると決意して始めた活動ですが、気がつけば二〇一七年で十六台目。なのにこれを続けるエネルギーや情熱といったものは不思議となくなりません。これから先にもどのようにするかと問われても、義務ではなしいつでもやめられることだと割り切ればことさらに先を苦にするつもりも無い。この自然体が大切なんでしょうね。ささやかではありますけれども世の中のためになっていると思えば、勇気も湧いてきます。それでまた人に声をかけ自らも体を動かす。

見方を変えると、私たちのしていることは、「同窓のための同窓会から地域社会の組織へ」という流れを作りつつあるところなのかもしれません。だからこの車椅子の活動も、あれこれありながらも続いてきたのかも知れない。この「武陽社会貢献有志の会」には、兵庫高校卒業生の他に、趣旨に賛同して「社会貢献運動」に加わって下さる一般の会員もいます。この方々の中には「武陽会」がなんなのか知らない人もいらっしゃる。でもそれで何の問題もありません。みんなを繋いでいるのは同窓という絆だけではなく、言うまでもなく「こころざし」です。会員の現実の活動を目的としたら、これまでは、これまでの同窓会は内向きの組織である、という至極当然と思われていたポジションから、我々が現実生きていく地域社会へと座標を遷し、より広い視野を獲得して存続していくべきではないか、ということ。これは「同窓会の解体」ではなく、言わば新たな同窓会の形、新たな目的を持った地域社会とともに発展していく組織になることを意味します。本来、同窓会は、同窓でない人にとっては



▲第7回目・2013年 メゾン悠遊からの感謝状

在しないも同然です。同窓会員もまた、どちらかと言うと内輪のクラブを形成しがちです。

私たち「有志の会」は、車椅子の贈呈を目的とする活動が続ける中で、社会のさまざまな人たち、組織、団体と交わって来ました。無論、兵庫高校の同窓会である武陽会の会員諸氏の協力も小さくありません。そして思うのは、我々が武陽会も、社会との間合いをはかりつつ、変革へのベクトルをその内に秘めているのではないかと、いう感触です。この活動では、武陽会は会員ではない一般の方々の存在を、活動のパートナーとして認めてもいます。

「有志の会」の活動は、ただあれこれ夢を語るのではなく、実際に体を動かして社会の中にその位置を占めている組織であると、自信をもって他にも言い、自らも任じて努めています。今後とも少しでも社会のお役に立てる、自然体で進む会でありたいと思っております。■



▲第15回目・2017年4月24日
介護老人保健施設サニーピア

▲第12回目・2015年7月6日
社会福祉法人神戸中央福祉会 塩屋さくら苑のみなさん



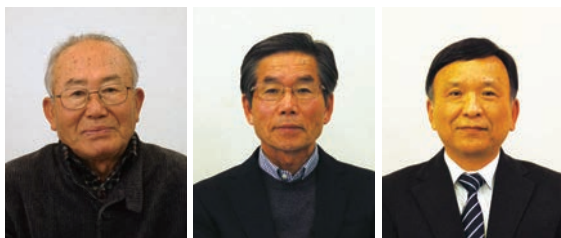
●連絡先
〒360-0812 熊谷市大原 1-9-1 熊高同窓会事務局内
熊高森づくりの会事務局：長野順一
TEL 048-528-2333 / E-mail : info@honjo.spec.ed.jp
http://kumako-mori.undo.jp/index.html

森をつくる

埼玉県立熊谷高等学校同窓会

くまこう 熊高森づくりの会

生命の源＝森をつくり続ける



左・長野 順一（ながの・じゅんいち）氏（熊高森づくりの会幹事／同窓会事務局長）
中・杉田 勝彦（すぎた・かつひこ）氏（熊高森づくりの会幹事長）
右・松本 淳一（まつもと・じゅんいち）氏（熊高森づくりの会事務局代表）

●埼玉県立熊谷高等学校同窓会の有志による「熊高森づくりの会」では、県西部の長瀨町にある宝登山で森作りの活動を行っている。ふるさと熊谷を流れる荒川の水源域に位置する長瀨の地で、緑を維持し自然を守ろうとするこの活動は、年々広がりを見せ、現在では在校生も含めた一大イベントになっている。このユニークな活動の始まりと現状を中心となって運営している方々に伺った。

「熊高森づくりの会」は、熊谷高校OB有志によって平成二十年（二〇〇八）七月五日に設立されました。設立の背景には、当時、全国的に自然が失われつつある状況とそれに対する「緑の復活」への動きがありました。また既に秩父で熊高のOBが「秩父百年の森」という名で植林し森を育てているという実績もありました。

こうした動きの中から「荒川流域に熊高の森を作る」という「夢」が次第に大きくなり、平成十七年（二〇〇五）から熊高OBの県議会議員や県職員、候補地である長瀨町の方々などを中心に具体化に向けた話し合いが幾度も持たれ、広く熊高OBに呼びかけてこのプロジェクトを立ち上げたのです。植林する土地は、当時の長瀨町町長で熊高OBの大澤芳夫氏の尽力により借りることができました。

当初、OB有志で始めたプロジェクトでしたが、最終的にこの活動を熊高同窓会の「事業」として位置づけることが決まり、同窓会として毎年の植林（育樹祭）に加え、下草刈りなどの各種整備作業を行っています。これにより熊高は埼玉県の「緑化推進校」に指定されています。

この会は熊谷高校同窓会の下にあるわけですが、実際の作業ではOBに限らず会の趣旨に賛同される方々が集まります。第二回の育樹祭には、熊高OBの関口照生さんと女優の竹下景子さんご夫妻も参加され記念植樹をして下さいました。竹下さんからは福島県三春町の「滝桜」の苗木を頂きました。このように苗木は有志の方々から頂くことも多く、また各地の同窓会支部からの記念植樹の申し出もあつて、年々この活動の広がりを感じております。

育樹祭+懇親会は毎年秋に一度開催します。その前には、育樹祭の準備を兼ねた下草刈り体験作業を二度、埼玉県農林公社の方の指導のもと、有志十数名が集って行うのが恒例になっています。

この会の活動の財政基盤は、基本的には「賛助会員入金金」「会員の通信費・年間千円」と「新入会員の入金金・一口五千円で二口を目処」、任意の「随時会費」から成ります。会員は千名を超えています。「通信費」「随時会費」を納めている人がそれぞれ一割程度なのが実際で、会費の納入率をどのようにして上げるか、これが課題だと感じております。またこれとは別に、有志からの大口寄付もあります。これは別会計で、山道の排水路の整備など特別の支出に充当されます。更に、地元長瀨町のみならず、県内の各種の企業・団体からさまざまな形で支援を頂いております。

さて、この「熊高森づくりの会」の活動を進めていく中で見えてきたことが幾つもあります。まず第一に、参加者各人の「緑の大切さ」への意識の高まりが挙げられ

ます。更に参加者のご家族など周辺の人々への影響も見逃せません。第二に、在校生（同窓会予備軍）の参加です。これが近い将来の同窓会と「熊高森づくりの会」のコアになってくれるだろうという期待があります。ですから気分は遠足でも構いません。参加してもらうことに意義がある少し遠回りのリクルーティングですね。第三に「熊高の森」の所在地周辺の人々との交流が生まれたこと。これは非常に重要です。そして第四に、この活動は熊高の生徒全体、熊谷市・埼玉県全体に対してのメッセージである、ということなのです。

近年の少子化の影響は、熊高同窓会でも現実のものとなっています。「熊高森づくりの会」は、幸いにも元気で活発なOBの熱意と努力で実現しましたが、この活動を継続していくためには、在校生のより自主的な参加を促すとともに、ともすれば旧態依然たる組織と見られがちな同窓会のイメージを払拭し、同窓会本来の活力あふれる組織としての姿を取り戻すことが必要です。同窓会のつながりがあつたからこそ実現したこのプロジェクトを、同窓会再活性化への歩みとして、また社会における一つの力強い存在として、これからも続けて参りたいと思っております。



▲育樹祭の記念コースター
埼玉県産の間伐材を使用し
障害者の施設で作られた



●連絡先

山形県立米沢興讓館高等学校 同窓会

〒 992-1443

米沢市大字笹野 1101

米沢興讓館高等学校内

TEL: 0238-38-4741

E-MAIL: info@yonezawakojokan.jp

URL : http://www.yonezawakojokan.jp/index.html

私と同窓会

こうじょうかん

山形県立米沢興讓館高等学校

いわね

同窓会 遠藤 岩根

『興讓』の精神の継承

母校同窓会は五年ごとに同窓会名簿を発行してきた。平成十八年からサラトさんにお願ひしてきた。この時の「編集を終えて」に、当時常務理事の任にあった私が次のように書かせてもらった。

「雪国に住む我々が待ちに待った季節を迎えた頃、名簿発行で今回からお世話になったサラトさんから次のような連絡が入った。『調査対象者二二六〇七名、判明率が八三・一％。更に名簿予約販売計画も結構良い線までこぎつけている』と。

そして今回の二十八年度版発行にあたって「個人情報云々のこのご時世に名簿は必要なのか」理事会などで話し合いを重ねてきたが、結局「正確な名簿は良い同窓会活動の土台」との思いから発行の継続を決定した。そしてサラトさんによる三回目の名簿が出来上がった。

その表紙に「米沢興讓館創立二二〇年」と「藩校興讓館二四〇年」と印字されている。

思えば私が入学を許されたのは一九五六年（昭和三十一年）である。その頃も『凱歌』、栄えある歴史三百年、連綿尽きぬ興讓の・・・と歌っていた。母校の創立はいつなのか今でも時おり話題になる。本校の歴史を語るとき、直江兼統の「禅林文庫設立」（一六一八年）までさかのぼれば丁度四百年。四代藩主上杉綱憲の学問所（一六九七年）を起点にすれば三百年を過ぎてしまった。そして藩校興讓館二四〇年は、上杉鷹山の師、細井平洲先生によつて『興讓館』と名付けられた一七七六年から数えたもの。さらに学校令がしかれた一八八六年の『米沢中学校』から数えれば

一三〇年という事になる。なおこの年の開校式（九月十九日）が現在の本校の創立記念日の由来である。嘗てはこの日に毎年同窓生の集いを実施してきたが、数年前から働き盛りの若者の多くの参加も期待して、この日に近い土曜日に変更している。

ところで三代前の松野同窓会長が『興讓館の絆』という題で次のように記しておられる。

「五年ごとに発行される会員名簿をひもときながら、各人各様の感想を抱かれることであろう。消息不明の級友の居所が判明したり、最近まで息災だった友が不帰の客となっていたり、悲喜こもごも。そして五年分の後輩のページが増えて、「降る雪や明治は遠く、なりにけり」という明治生まれの感慨を、大正・昭和生まれも否応なしに痛感される向きもあるかもしれない。さて、望ましい同窓会員名簿とはどんなものであろうか。まず一貫性があり、正確であること。そして古い先輩の足跡が残るもの。つまり同窓生の絆として役立つものでなければならぬ」

ちょっと引用が長くなりましたが、このような思いを実現するには、各学年の結束と卒業生各人の母校愛、そしてサラトさんのご協力にお頼りするほかありません。

これからも後輩諸君は、我々がそうであったように、連綿尽きぬ興讓の精神を受け継ぎ、新たな価値創造を目指して努力されるであろうことを期待して母校の紹介とさせていただきます。■



◀創立 130 周年記念式典



▼米沢興讓館高等学校



補習科という支援

福島県立磐城高等学校同窓会



●連絡先

〒 970-8026 福島県いわき市平字高月 93
 福島県立磐城高等学校 同窓会館事務局
 TEL 0246-21-2023 (9:30am ~ 4pm)
 FAX 0246-38-4081
 E-mail: takatuki@alto.ocn.ne.jp

鈴木 仁 (すずき・ひとし) 氏 磐城高校同窓会館長 (高 21 回卒)
 と事務局スタッフ

OB によって支えられてきた 自前の予備校「補習科」の 今とこれから

●福島県立磐城高等学校では、昭和三十三年（一九五八）四月、同窓会活動の大きな柱として卒業生の進路指導の「補習科」を開講した。この「補習科」は昭和三十七年（一九六二）四月に「卒業生講習会」と改称し、今日に至っている。かつては全国で見られた「補習科」だが、現在でも実施されている高校はごく少なくなっている。この「補習科」誕生の経緯と運営の歴史および現状を同窓会館館長の鈴木仁氏に伺った。

「補習科」というのは、公立高校に併設するよう形で設置された予備校です。一九五〇～六〇年代、特に地方の高校でこの「補習科」を設けることが多かったようで、いわば高校が運営する「予備校」のようなものです。当時は、地方には予備校が非常に少なく、予備校へ通うことは地方の受験生にとっては、経済的にも精神的にも負担の大きい時代でした。こうした事情はいわき市も同様で、受験生の親の負担を考え、進学熱に燃えた PTA と同窓会の方々が協力して「補習科」の開講を決め「卒業生講習会」を開始します。これが磐城高校の「補習科」の始まりです。

この「卒業生講習会」は、当初から磐城高校卒業生だけではなく、お向かいの磐城女子高校（現・磐城桜が丘高校）の卒業生も受け入れての運営を行い、講師は磐城高校の現役の教師でした。まあ自分の教え子を引き続き教えることになるわけですね。教師の方も責任のようなものを感じておられます。ですから、教師にとっては大変な仕事量だったと思いますが、いざずれも磐城高校の OB です。熱の入り方も大きかったでしょう。また受講料に關しては、年によって違いはあったようですが、いざずれにしても格安だったと聞いております。受講者数は最大時で三百人以上。教室と講師の数が足りませんでした。午前と午後の二部構成を実施したこともありました。

今日、この「卒業生講習会」は新たな公益法人制度への移行に伴い、「一般財団法人高月育英会高月講習会」となり、同窓会館内で行われています。近年の受講者数は二十数名ほどで、受け入れる範囲も市内の全高校に広がっています。震災の後には子供を近くに置きたいとの親の思いもあり、受講者も一時的に五十人くらいに増えましたが、今後増える可能性は小さいでしょう。ご承知の通り、現在では大小の予備校が大都市だけではなく地方都市にまで進出し受講生の獲得を競っています。加えて少子化の影響は確実に広がってきています。

「高月講習会」の特徴は、民間の予備校と較べて受講料がかなり安いということにあります。とは言っても、もちろん質が低くは話になりません。受験の内容の変化にも追隨していくためには、講師の努力だけでは間に合わない部分もあります。そこで「高月講習会」では、河合塾と協力し DVD やテキストも使用、より現実に合った授業を行っています。何より経験豊かな元高校教師が、多方面に目配りをして授業を行っているのが特色となっています。

現状では、この「高月講習会」は同窓会の事業の中で最大のものです。しかし財政的には、同窓会と「高月講習会」は別もの



◀ (財) 高月育英会高月講習会館

▼講習会の授業風景



として扱われていて、安定的な運営のためには四十人程度の受講生の獲得が必須です。しかし現状はそれに遠く及びません。そのため、同窓会の支援を頂いております。

これまでもこれからも、こうした施設の存在は重要でありましたし、今もその意義は変わらないと思います。現在は磐城高校 OB や熱意ある方々の尽力に支えられ存続している観のある「高月講習会」ですが、磐城高校の学級減もあり、講習会の継続をどのように描けるか、難しい局面にさしかかっていることをひしひしと感じているところでです。



確かな日々を綴る

宮崎県立宮崎大宮高等学校弦月同窓会 第11回生同窓会「いちいち会」



●連絡先

宮崎県立宮崎大宮高等学校弦月同窓会

〒880-0056 宮崎市神宮東1丁目3番10号

MAIL: non-h@miyazaki-catv.ne.jp (原田 紀子)

右: 原田 紀子 (はらだ・のりこ) 氏 (同窓会副会長 / 「いちいち会」会報委員長)

左: 杉山 和男 (すぎやま・かずお) 氏 (「いちいち会」会報委員)

同期に向けた会報を続けて

●宮崎県立宮崎大宮高等学校弦月同窓会の中の第十一回卒業生の集まりである「いちいち会」では、同期を対象とした会報の発行を続けている。他にもあまり例を見ないこのユニークなスタイルの同窓会活動について、弦月同窓会の副会長であり「いちいち会」会報委員長の原田紀子氏と、同じく会報委員の杉山和男氏に、在学時の様子と会報発行の動機、その活動内容について伺った。

本校は、旧制宮崎中学校、宮崎第一高等女学校、宮崎商業学校、宮崎女子商業学校が前身で、戦後の学制改革により昭和二十三年(一九四八)に新制高等学校となりました。私も昭和三十一年に入学したときは、普通科八クラス、商業科五クラス、家庭科(後に家政科と改称)三クラスの併せて十六クラスという大所帯でした。その後、学校再編で翌昭和三十三年に宮崎商業高校が独立、平成元年(一九八九)に文科情報科の新設、平成六年に家政科の閉科と続き、現在は普通科・文科情報科の二科におよそ千二百名が学んでおりますが、今年はこちらで創立百三十年を迎えます。私も昭和三十四年三月卒業の新制の十一回卒業生ですから「いちいち会」と名乗っています。入学当時は三科ありましたが、当然のことながら科が違えば授業内容も違います。しかし「いちいち会」は三科横断の同期ということで、同窓会としてはひとつ、という考えは共通しておりました。とは言っても、なにしろ十六クラス七百九十一人もの同期です。部活や行事など以外には、他の科との交流はまずありませんでした。そういうわけで三十代の後

半に三科合同の同窓会を立ち上げ、その後会報発行にも取り組みました。この同期に向けて特化した「会報」の積み重ねによって、個人個人の間が近くなっていったのは確かだと思えます。

この「いちいち会」の第一回同窓会は昭和五十四年(一九七九)に開催されました。以来、二年に一度、宮崎市で開催して参りましたが、現在でも毎回百五十名近い方々が集まります。昭和六十二年(一九八七)の第六回同窓会の時から、「いちいち会会報」の発行を開始しました。同窓会活動をもっと楽しくやろう、同窓会の集まりに出席できなかった人たちに会の様子を知らせよう、そして互いの消息や活動ぶりを伝えよう、というのが発行の目的です。その点では「同窓会報」そのものなんですが、印刷を除く制作のプロセスを会員が行うことで、この発行作業自体が会員にとって大きな刺激になっていると感じます。創刊号はB4判四ページと、ささやかなものではありましたが、活字になった喜びは大きく、それから三十年、内容も充実し、最新の二〇一八年版・第十六号では六十八ページまでになりました。現在、発行は二年に一度、部数は三百部です。

会報の制作に当たっては、同窓会案内と原稿依頼の文書を同時発送、集まった原稿は会報委員会がパソコンに入力し、デザインなどに強い会員がレイアウトなどとして体裁を整え、データを出版社に持ち込むスタイルです。その分、お安くなるのも嬉しいのですが、手間をかけること自体が楽しいものだと思います。この形はずっと続けていきたいと思っております。

会報は会費納入者へのみ送ります。会費は二年に一度二千元を頂いています。会報の制作費などはすべてこれでまかなっています。内容は同窓会の模様を伝えるとともに、寄稿については、近況あり短歌俳句あり、趣味の作品の写真投稿ありとさまざま。いずれも年月を重ねてきたことへの感慨にあふれているのはもちろんですが、これからの人生への眼差しも力強くあつて、それがまた会員相互の刺激になっているのがうかがえます。

また「いちいち会」では毎月十一日の夕方から、市内の料理店でおしゃべり会を持つのが慣例になっています。いわばオフ会ですね。会員ならば予告も不要で自由に参加できます。会費は割り勘、二次会も行きます。こうした集まりに出ていますと、親や兄弟とは違う、同じ時代を横並びで生き、共に歳をとる、同窓生ならではの関係にえも言われぬ幸福感を覚えます。

私も喜寿になるわけですが、宮崎大宮高校に学んだことを機縁として大切に、この「いちいち会会報」を一号、更にもう一号と続けて参りたいと思っております。





校内美化から街へ

滋賀県立伊香高等学校同窓会

「山静かなる伊香の里」を守る同窓会のチカラ



左から

大橋 成年 (おおはし・なるとし) 昭60高/教諭
松井 芳子 (まつい・よしこ) 昭44高/同窓会副会長
河路 英夫 (かわじ・ひでお) 昭41高/同窓会会長
山田 健一 (やまだ・けんいち) 昭42高/同窓会副会長
山田 薫 (やまだ・かおる) 伊香高等学校校長

その結果、二〇〇六年ころから地元有志が年に二回集まって、キャンパス内の除草作業を主に行って現在に至っています。他校ではシルバー人材センターなどの業者に依頼することが多いようですが、当然費用もかかりますし、母校の支援ということ

伊香高校は滋賀県最北の高校でして、雪も大いに降りますし、野生動物も出没するという自然環境の中にあります。山裾に広がるキャンパスは、かつて農業科を有していたこともあって一般の高校よりもかなり広く、全体が傾斜地に広がっています。そのため校舎や各種施設、運動グラウンドなども整地した上で配置されていますから、キャンパス内の移動はアップダウンが多く、冬の除雪や、樹木の剪定、除草などには大変な労力を要します。通常それらの作業は学校の用務員が行うわけですが、余りに作業量が多く、とても手が足りません。かつては農業科の生徒が実習の一環として除草その他の作業をしていましたが、ケガや事故の心配もあり、今ではやっておりません。そこで同窓会が、学校の美化作業を手伝おうということになり、卒業生(同窓会員)に呼びかけたのがそもそもの始まりです。

琵琶湖の北端に近い滋賀県立伊香高等学校同窓会では、毎年二回づつ母校の美化活動を行っている。同窓会有志によるボランティア活動だが、これが定期的に行われることで、有志の連帯感が強まり、同窓の意識を固める手段のひとつにもなっているらしい。その中心となつて活動を続けている方々に具体的な話を伺った。

で、同窓会の会員によるボランティア活動という形が自然ではないかということでも始まったわけではあります。

現状は年二回、五月と十月の中頃、近在のOBを中心として十数名が集まり、これに同窓生職員が五六人加わって、草刈り機と鎌を使って運動場周囲の斜面などの除草をしています。実施するのは平日の授業の無い日の午後、大体二時間ほどです。先にも申しましたように、広いキャンパスですから草刈りが必要とする所も多い。しかし三つもある運動場の周囲をきれいにするのは容易ではありません。

日取りが決まると同窓生に声かけをしています。なかなか参加者は増えませんが、若手は仕事が忙しいのと平日催行というのがネックなのでしょう。また遠隔地からの参加はまず見込めません。結局、地元のリタイアしたOBが主体となつてやっているというのが実際です。しかしこれも順次若手会員に引き継いでいかねばなりませんし、具体的にどのようにアピールしていくのか、思案中です。

それでも、この校内美化の活動を中心として、馴染みの同窓生が定期的に顔を合わせるというのは楽しみでもあり、また同窓の消息を伝え合うなど、同じ地域に住む者として大切な機会を得ていると感じています。時が経ち学校との繋がりが急速に薄れていくというのはよく聞く話ですが、私たちは逆に近づいている。草刈りは決して楽ではないけれども、母校と繋がりを保っていることを実感しますし、同窓生とともにこうした活動ができるということにも、また格別の感慨があります。



▲同窓会地元有志による校内草刈り



●連絡先

伊香高等学校同窓会 (伊香高等学校校内)
〒529-0425 滋賀県長浜市木之本町木之本 251
TEL : 0749-82-4141 / FAX : 0749-82-4477
e-mail : ohashi-naritoshi-1714@pref-shiga.ed.jp
URL : http://www.ika-h.shiga-ec.ed.jp

足腰の鍛錬を兼ねてキャンパスの除草をするのが習わしです。また野球部の諸君も放課後に近所の幼稚園の除雪に行くなど、地域の中での活動を続けていますし、更に在校生の有志は学校で栽培した花のプランターを国道八号線沿いに設置、湖北の季節を彩る活動をしています。そうした経験を通して母校や地域への意識を培った在校生たちが、やがて私たちの活動にも加わり、在学時同様、学校と地域の絆を深めていってくださることを期待しております。



栃木県立栃木高等学校同窓会 事務局
 http://www.tochigi-edu.ed.jp/tochigi/nc2/
 〒 328-0016 栃木県栃木市入舟町 12-4
 栃木県立栃木高等学校
 TEL 0282-22-2595・2596
 FAX 0282-22-2534

わが学び舎

栃木県立栃木高等学校

文武両道、独立自尊を实践する

沿革

明治二十九年（一八九六）四月一日、栃木県尋常中学校栃木分校として創立（栃木町大字藪部旧県庁構内）。

明治三十二年（一八九九）四月一日、栃木県第二中学校と改称し独立。十一月十五日、近衛師団北関東大演習のため明治天皇行幸、十八日まで本校行在所となる。

明治三十四年（一九〇一）、第一回卒業式（五十六名）。五月一日、栃木県立栃木中学校と改称。

明治四十三年（一九一〇）、講堂新築落成。皇太子殿下（大正天皇）本校視察。

大正三年（一九一四）、記念図書館落成。大正七年（一九一八）十一月十三日、大正天皇行幸（陸軍特別大演習）、十九日まで本校を大本営とされる。

昭和十年（一九三五）、養正寮開寮式。

昭和二十三年（一九四八）、栃木高等学校と校名変更、三年制一学年三百名。

昭和二十六年（一九五一）、栃木県立栃木高等学校と改称、生徒定員九百五十名。

平成八年（一九九六）十一月十三日、創立百周年記念音楽祭（東京フィルハーモニー）。創立百周年記念式典挙行。

平成十年（一九九八）、講堂・記念図書館が文化庁の登録文化財となる。

平成十二年（二〇〇〇）四月二十八日、記念館が文化庁の登録有形文化財となる。

平成二十一年（二〇〇九）、「高校教育活性化プラン」とちぎの誇れる人材育成プラン」指定校となる。

平成二十四年（二〇一二）四月一日、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業に指定される。■

表紙写真・解説

記念図書館（養正寮・登録有形文化財）
 本校正門脇にたつ「養正寮・記念図書館」は、旧栃木県立栃木中学校の記念図書館で、大正三年（一九一四）十一月の竣工。木造二階建て瓦葺の建物。明治四十三年九月に皇太子・嘉仁親王（後の大正天皇）の来校を記念して建設されたもの。一階は図書室、二階は同窓会の集会所として使用された。昭和十年（一九三五）に階上の和室は「養正寮」と名付けられ、生徒の精神修養の場として、校長訓話や漢籍素読会などが行われた。現在、一階は学習室、階上は囲碁将棋部の活動をはじめ、小集会場として活用されている。なお、講堂とともに、平成十年（一九九八）七月二十三日に国の有形文化財に登録された。■

講堂（登録有形文化財）
 旧栃木県立栃木中学校の講堂として、明治四十三年（一九一〇）二月に竣工。木造平屋建て瓦葺の建物。その美観は現在も当時の面影を残している。

昭和五十七年（一九八二）記念図書館（養正寮）とともに、日本建築学会より建築学的にみて貴重な日本近代建築との選定を受け、平成十年に文部省により文化財登録された。現在は集会や学校行事をはじめ、「蔵の町かど音楽祭」など地域の催し等にも利用されている。

記念館（御聖蹟・登録有形文化財）
 旧栃木県尋常中学校栃木分校本館として、明治二十九年（一八九六）に竣工。木造二階建て瓦葺。本校最古の二階建ての建



◀記念館（御聖蹟）
 手前は県庁堀にかかる橋。澄み切った堀を錦鯉が悠然と泳ぐ。



▲講堂（旧栃木県立栃木中学校講堂）

築物。当初一階は校長室、事務室、宿直室などに使用されていた。明治三十二年（一八九九）十一月十五日より四日間、近衛師団北関東大演習では改造されて明治天皇の行在所となった。さらに大正七年（一九一八）十一月十三日から七日間行われた陸軍大演習では本校に大本営が置かれ、その際にも大正天皇の行在所となり、以来「御聖蹟」とも呼ばれる。これ以降、階上は文部省史跡に指定され、永く本校の象徴として保存されてきた。国の文化財保護審議会は、平成十二年（二〇〇一）二月十八日にこの記念館を登録有形文化財として登録することを答申した。■

ごあいさつ

福田 裕一

もっと便利に！
会費徴収をクレジット決済で！



株式会社サラト・代表取締役
福田 裕一（ふくだ・ゆういち）

●詳しくは、弊社ホームページから
URL : <http://www.salat.co.jp/>

昨年（二〇一七年）秋より弊社では、新サービスとして「クレジット決済による会費徴収」をスタートさせました。これは、従来の郵便局やCVS（コンビニ）収納に加え、お手持ちのパソコンやスマホ・タブレット端末からクレジットカードの引き落としによる会費納入が可能になるサービスです。

現役世代の同窓会員にとっては、通勤など移動中の電車の中や自宅など、どこからでも払い込みが可能になり、これまで以上に手軽に同窓会へ協力することが出来ます。

また同窓会事務局にとっては、郵便局・CVS・クレジットがワンパッケージで管理できるメリットがございます。（弊社最大の強みです。）

現在、多くの同窓会様からお問い合わせを頂戴し、今年から早速いくつかの大学同窓会様で導入されることが決定しております。

この新サービスを導入した背景には、ご承知のようにスマートフォン（スマホ）の普及と、それに伴うECショッピングサイトの利用率の増加があります。

総務省が毎年発表している「情報通信機器の普及状況」によると、9割近くあったパソコンの普及率は、二〇〇九年頃を境に年々低下する傾向にあり二〇一七年には7割強まで低下しております。一方、スマホの普及率はこれとは対照的に二〇一〇年頃から爆発的に増加しております。これは、二〇〇七年のiPhoneの登場、二〇一〇年のアンドロイド端末の発売によるものです。また内閣府が発表している

「消費動向調査」によると、特に二十九歳以下の世帯主年齢層別パソコン普及率は低下傾向が顕著であり、この「パソコン離れ・スマホ依存」の傾向は今後ますます進むものと推察できます。

さらには、Amazonや楽天などのECショッピングが全世代で日常的に利用されるようになり、クレジット決済に対する抵抗感が薄れてきていることも理由の一つです。

今ではクラウドファンディングなどインターネットを積極的に活用した資金調達が行われるなど、今後ますます必要と

●制服リカちゃんに

新しい仲間が増えました

ご好評をいただいています「オリジナル制服リカちゃん」に新しい仲間が増えました。「山形県立鶴岡北高校」です。

この制服リカちゃんの製作はサラトが代行しております。また、製作経費も同窓会や学校からいただくおこなっております。皆さんの学校でも「制服リカちゃん」にご興味ございましたら、お気軽にご相談ください。

0120・138・000（代表）



鶴岡北高校

© TOMY

同窓会のチカラ 2018年号 / Vol. 10

(2018年4月発行)

編集・発行 株式会社サラト

本社・〒670-0948 兵庫県姫路市北条宮の町172

TEL 0120-138-000 ● FAX 079-224-7746

東京支社・〒110-0016 東京都台東区台東4-18-7

シモジビル5F

TEL 0120-03-6381 ● FAX 03-3832-6389

E-mail eigy@salat.co.jp

URL : <http://www.salat.co.jp>

SALAT
Salat Corporation

サラトは昨年（平成二十九年）、全国百八十九校の同窓会名簿を納品させていただきました。発行にご協力をいただきました同窓会・学校・会員の皆様にご心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

されるサービスであります。年会費徴収だけでなく、周年事業募金や現役生徒たちの各種全国大会出場への応援募金など利用できる幅は広くご利用いただけるのではないのでしょうか。

同窓会がこれからは円滑にかつ永続的に活動するためには安定的な財源確保が必須であり、少子化が進む将来を見据えた対策が急務であります。

わたしたちサラトは同窓会と共に、時代に応じた活動をこれからもサポートしてまいります。